第四五回事業所訪問
こんにちは健保組合です！
南総総業株式会社の巻

オリンピックイヤーの二〇〇四年が開け、早くも「今年も暖冬だった」と巷の声が聞こえてきました。ところが、三月の声を聞いたとたん、千葉県では今年初めてまとまった雪が降りました。「三寒四温」を繰り返して、光の春から気温の春へ移り変わります。

＊　＊　＊

事業所訪問の第四五回目としてお邪魔したのは、千葉県の中東部、九十九里平野のほぼ中央に位置し、古くから、農業・商業等の産業を中心に発展し、山武郡市の中核都市としての役割を担っている東金市に所在する南総総業株式会社でした。

平成十五年度に再開された第一回事業所対抗野球大会で、念願の優勝旗を手にしたメンバーの大半が元気に働く職場を覗いてみたいというのが、今回、訪問することとなったきっかけです。

三月八日、私たちは、東関東自動車道、京葉道路、千葉東金道路を経由して今日の目的地に向かいました。

入社当時は日常的な倉庫内の積み卸しで一週間で靴がすり切れる

南総総業は、この企画の第一回目にお邪魔した「南総通運株式会社（土屋康郷社長）（以下、「通運」といいます）」のグループ企業で、顧客の業務効率化を支援するため、通運と緊密な連携を図りながら、製造・整備等関連業務を一括して請け負うトータル・ロジスティクスを提案している会社です。その関係で、本社は通運と同じ建物の中にあり、私たちが到着すると二階の社長室に案内されました。

土屋　孝 社長

「こんにちは健保組合です！」とごあいさつすると土屋孝社長が「ようこそ」と出迎えてくださり、ご多忙な時間を割いて取材にお付き合いくださいました。

今回の取材は、土屋社長の足跡をたどりながら同社の歴史をお聞きする形で進みました。

氏は昭和二十六年に通運に入社され、以来、現場中心に活躍されてきました。

当時の運送事業は、現在の物流からは想像できない荷役作業がもっぱらで、鉄道貨物が華やかなりしころ、受け付けた荷物に荷札をつけ、列車の到着に合わせて貨物駅までリヤカーで運んだそうです。

在庫管理も手がけられ、倉庫内の積み卸しは日常茶飯事ですが、もちろん、軽い物だけではありません「一週間で靴がすり切れた」とおっしゃるほど重労働の連続だったそうです。

しばらくして、現在の千葉支店の前身である千葉営業所を立ち上げられ、通運の事業拡大の礎を築かれたとのことです。

レストラン業を取っ掛かりにさまざまな業種に挑戦

南総総業は、昭和四十九年一月に産声を上げました。通運が多角経営を視野に入れ、異業種参入をめざして設立されたのが同社だそうです。

取っ掛かりは、レストラン業でした。はじめから利潤を上げての順風満帆経営は至難の業ですが、さまざまな業種への挑戦、ここからが躍進の始まりでした。

作業場が高温のため、なかなか作業員が集まらなかった構内作業を引き受けたり、効率の上がりにくい流れ作業を引き受けたり、遠方まで物資を運搬する仕事を引き受けたりと、数えたらキリがないほど幅広く営業活動を展開されたようでした。

「人がやらないこと」に魅力を感じ、情報のアンテナを常に敏感に張りめぐらせ、アイディアと情熱がこれらを成功に導いた秘訣とお見受けしました。

同年、大手飲料水メーカーの委託製造先ジャパンフーズ株式会社長柄事業所の設立を機に、得意とするアウトソーシングのノウハウを武器に、先方のニーズとうまく合致した業務展開を進められました。

それからも、大手企業を主要取引先として事業の拡大が進み、現状に満足することなく飽くなき発展を望んでいまも邁進しておられます。

土屋社長は、「骨を折ることは苦にならなかった」、そして、「通運の社長がアイディアをくれて、われわれはそれを実行してきた」ともおっしゃいました。

動くことを苦にしない氏は、自ら進んで現場に立ち行動してきたという自負が、現在のご自身を支えているのでしょう。

氏の歩んできた道のりはすべてが平坦ではなかったようですが、尊敬する通運の土屋社長と共有できた昔の想い出のすべてが、心の中の宝箱に詰まっていて、懐かしむようにそれを一つひとつ大切に取り出して語ってくださる姿が、とても印象的でした。

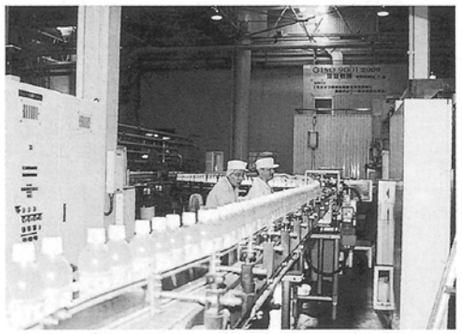
「親和・信頼・努力」を社訓に掲げ、地域密着型の企業として

最後に、現場一筋の苦労が結実し、平成十三年に社長に就任された氏に、これからの展望をお伺いすると、「変化に対応し、先を見て仕事をすること」また、「人の言葉を加工して、よりよいものを創造し、顧客のニーズに応えること」を挙げられました。いずれも「受け売り」との注釈がありましたが、氏が感銘を受けた言葉であり、今後も社の運営に役立てたいとおっしゃいました。

顧客の感動を自らの歓びとして感じ、やりがいのある仕事に打ち込める職場環境が、あの野球部の皆さんのはつらつとしたプレーの根源ではないかと、私たちは改めて感じました。

「親和・信頼・努力」を社訓に掲げ、地域密着型の企業として貢献している同社ですが、これからも、わが業界がめざす総合物流のなかで、イニシアチブを発揮していただきたいとお願いして、土屋社長への取材を終えました。

そのあと、通運の土屋庶務課長のご配慮で、ジャパンフーズ株式会社長柄事業所を視察させていただくことができました。同社の古川課長が案内をしてくださり、飲料水が出来上がるまでの工程を拝見しました。


清涼飲料水が次々と製品化される
（ジャパンフーズ（株）長柄事業所で）

「ここまで運送事業者がやれるの？」とだれもが思うほど、大規模な設備のもと、製造補助・ラベリング・箱詰等の作業を効率的にこなしており、空の容器に清涼飲料水が詰め込まれ、まるで生命を宿されたかのように次々と製品として生まれて変わっていく姿を目の当たりにすることができました。

南総総業はじめグループ関係者の皆さん、ほんとうにご協力ありがとうございました。

＊　＊　＊

帰路につき、車窓から外の景色に目をやると、梅の花がいまが盛りとばかりに咲き誇っていました。コブシは大きな蕾を抱いて、いまにもその可憐な花を披露するところでした。桜は、じっと自分の出番を待っているかのようでした。

四季のある日本、ほんとうに素敵な国ですね。